

ベーシック・インカムの哲学

すべての人にリアルな自由を

第5章 搾取と実質的自由

< 搾取 >

「搾取」の定義

他の何ものかの労働から不公正な利得を取得すること

筆者は、搾取を「他のなにものかの労働から不公正な利得を取得すること」としている。
そして、5章を通じて、この定義の意味を解説している。

説明上、定義を4つの部分にわけている。

何ものか
労働
不公正
利得を取得すること

[何ものか]

定義にのっている「何ものか」とは、搾取される者（被搾取者）をあらわしている。ここで想定されているのは、人間または人間の集団である。つまり、労働者階級と資本家階級の間という集団単位の搾取だけでなく、一人の労働者と雇用者間の搾取も含まれている。

[労働]

筆者がいう「労働」とは、他者に便益をあたえる活動のことである。この点、「労働」は脅しや報酬などの外的なものによって促されるものでなくてよい。自分の活動から、他人に利潤をひきだされていれば、搾取されているといえるのである。

<例> Aさんに言われた通りに、Bさんが遊び感覚でパソコンをうっている。しかし実は、AさんはBさんにコンピューターのソフトを作らせていた。もちろん、そんなことをBさんは知らない。そして、できあがったソフトでAさんは一儲けできた。この時、Bさんは脅されて強制的に活動したわけでもなく、報酬が払われたわけでもない。けれども、搾取は現におきている。

[不公正]

資産の不平等な分配の結果、一部の人々が裕福になり、他の人々が貧しくなること。つまり、それぞれで違った条件下で作業している労働者間の不平等を、仕方ないものと筆者は考えていない。

<例> 土壌が肥沃かどうかや、持っている道具の性能の違いによって、同じ広さの土地でも農産物の生産量（労働に対する報酬）が大きくかわってしまう。このような差異は、より能率的な手段にアクセスできたかどうかだけで決められており、本人に帰責性があまりない。であるのに、不平等な結果に陥るのは妥当でない。

[利得を取得すること]

生産の一部を専有することであり、便益を引き抜くことである。
言い換えれば、他の人々の利得を取得することをいう。

<例> ポテトを栽培しているAさんと、隣の家で暮らしているBさんがいる。
Bさんはポテトの栽培に全く貢献していない。なのに、Aさんからポテトをもらっている。

この時、Bさんは、Aさんの生産（ポテト）から便益をうけているといえる。
ただし、Bさんが農具を貸していたり、以前貸したお金の額分のポテトをもらうなどの、
一種の交換にあたるものがあるときは、搾取ではない。

つまり、「搾取」とは

「搾取者が、被搾取者の労働から利得を取得し、不公平な結果をもたらすこと」

と定義しなおすことができる。

論点

以上のように、筆者は「搾取」について述べている。
ここで問題となるのが、ベーシック・インカムが搾取にあたるのかどうかである。
ベーシック・インカムでは、怠惰な無収入者（搾取者）が、労働して収入を得ている者（被搾取者）から利得（ベーシック・インカム）を取得し、不公正な結果（労働していない怠け者が、働いた人の収入から給付を受けている）をもたらしているといわれる。
しかし、見方を変えれば、ベーシック・インカムが困窮者を救える可能性もある。
そこで、ベーシック・インカムを「搾取」と定義すべきかどうか話し合ってもらいたい。

ルターの搾取

・搾取のルターの概念

ある人が所得を通して専有する以上に社会的必要労働に寄与している場合、その人は搾取されている。逆の状況ならその人は搾取者となる。

・貢献と報酬 + 労働価値

人々の貢献およびそれに対する報酬をそこに含まれている労働価値の量に応じて評価することは、規範的ではない。なぜなら、労働者たちの専有するものの労働価値は常に彼ら自身が消費者として行う選択の気まぐれに左右されるからである。

・労働努力と社会的必要労働

労働努力が社会的必要労働から乖離する場合には、協業の公正さにとって重要なのは明らかに労働努力の方であり、社会的必要労働は厄介でしぶしぶ採用される代理指標にすぎない。

例：たとえば、ブラックはグリーンよりも生産性が高いとすると、どのようなタイムスパンで見ても、ブラックたちはグリーンたちよりも多くの労働価値(社会的必要労働)を付加しているし、それゆえに、彼らとその所得を通じて専有するまたは専有しうるものよりも多くを貢献しているのである。最初のものにせよ、様相的なものにせよ、純価値専有という定義のもとでは、彼らはまったく同じように働き、きっちり同額の報酬を受け取っているとしても、生産性の高いブラックたちは被搾取者となり、生産性の低いグリーンたちは搾取者となるのである。

努力に応じて各人に

・努力に応じて各人に

所得は労働努力に厳密に比例すべきであるというのは明らかにベーシックインカムと相容れない。その一方で、ある人の所得水準はその人の労働によってポジティブな影響を受けるべきだということについては直観的に否定しえない。異なる努力には異なる報酬を、という正義にもとづく訴えは、ベーシックインカムの社会においても、完全に受け入れられる。

・労働の長さとその質

Veen は長さとその質の二つの次元を分離し、労働はその長さに応じて報いられるべきであ

るという見解を保持する一方で、労働の質はマキシミンに、つまり、最も悪いジョブの質を最大化するように配分されなければならないとしている。

・「努力に応じて各人に」原理

弱いヴァージョン

この原理の最も弱いヴァージョン(努力と所得の間にはポジティブな相関関係があるべきだ)が推奨されるにしても、我々のリアル・リバタリアンの基準によって明確化されたように、機会の公正な分配という文脈ではその最も弱いヴァージョンは余計な物となってしまう。この文脈では、所得と生産努力との間の強い正の相関を期待するもっともな理由がある。

そのひとつは、非自発的就業がない時ベーシックインカムが得られることによって、それが直観的に魅力的でない場合に給与の低いジョブを拒絶することも、直観的に魅力的である場合にその低賃金労働を受け入れることも、ともに低いコストで可能となるのである。

ローマー的搾取

・ローマーの定義づけ

人々のいまの資本賦与を平等化した結果、ある人がより豊かになるとしたら、その人は資本主義的に搾取されていることになり、より貧しくなるとしたら、その人は資本主義的搾取者となる。回収定義や平等一分配定義も同じである。

・ローマーの搾取の四類型

これは段階的に要件を弱めることによって定義される。封建的搾取の存在は資本主義的搾取の存在を含意しており、それが今度は社会主義的搾取の存在を含意し、さらにはそれがニーズ搾取の存在を含意するのである。これは次のような帰結をもたらす。

つまり、ある人は、社会の平均的な成員よりも少ない財産、低いスキル、そして高いニーズを持っているにもかかわらず、単純にその人が持つ他の人々に対する封建的な特権から得る便益の程度に応じて、資本主義的搾取者・社会主義的搾取者・ニーズ搾取者となってしまうのだ。

・ローマー的搾取

ローマー的搾取は封建的搾取、財産的搾取、スキル搾取、ヘルス搾取の四つの基本類型

によって構成される。それぞれ、形式的自由の不平等分配、譲渡可能な生産手段の不平等分配、譲渡不可能な生産手段の不平等分配、所得を物質的厚生に転換する能力の不平等分配、これらに付随する搾取である。

資産にもとづく不平等

- ・資本の不平等から所得の不平等

同等の資本量でスタートしても、熱心/節約的な人々と怠惰/浪費的な人々では、結果として、資本はすぐに不均等な配分状態となり、これによって一部の人は他の人よりも少なくしか稼げなくなるだろう。ここにきて、所得不平等は資本資産の不平等から生じていることになる。

- ・外的賦与の平等の方がローマーの財産搾取の廃棄よりも望ましい。

- ・リアル・リバタリアンの提案

あらゆるコストを払ってローマー的財産搾取を廃棄するよりも、あまり搾取的ではない状況が被搾取者にとって悪くなり始めるポイントまで財産搾取を縮減すること。

論点

「努力に応じて各人に」原理において、弱いバージョンと強いバージョンのどちらがより推奨されるべきかについて、議論してもらいたい。

参考文献

P.ヴァン・パリース『ベーシック・インカムの哲学』（勁草書房, 2009）